目が覚めるとそこは異世界だった！？

装飾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目が覚めるとそこは異世界だった！？

【Ｎコード】

Ｎ０８０５Ｗ

【作者名】

装飾

【あらすじ】

少年、風間信玄はが目を覚ますとそこはいつの間にやらまったく知らない世界

風間は戸惑いながらも帰るすべが分からない以上ここでの生活を余儀なくされる

第一話　目が覚めるとそこは異世界だった！？

物語ってのはいつも唐突に始まる物なのだろう。

「……どこだ、ここ」

そして、気づけば見知らぬ場所ってのもありがちだ。
べつにここから二転三転するわけでもない。
ただのありがちな話だ。

「あ、ようやく目が覚めたんですね」

体を起こして少しあたりを見渡してると声をかけられる。
どうやらここは誰かの家らしい。
ということは、十中八九、今、声をかけてくれた人のだろう。
と、そんな冷静に考えるよりまずは返事をしないと。

「はい、ところで二つほど聞きたいことがあるんですが、まず状況からみてあなたが俺を助けてくれたのでしょうか」

「ええ、あなたが家の前で倒れていたので介抱させていただきました」

やはり、どうやらこの人は恩人らしかった。
ところで、今から少し話はずれるけど、ようやく寝ぼけも覚めよくよくこの人を見てみるとこれがまたすごい美人だ。
髪は綺麗なブロンドのロングストレート。
顔も全体的に整っていてすごく綺麗だ。
なかでもあの紅色の眼はまるで宝石のルビーを想像させるようなとても美しい色をしている。
身長も女子の中では大きいほうだろうか、体のラインもしっかりしてるし、これがおそらくモデル体型ってやつだろう。

おっと、思い切り話が脱線してしまった。
他にもまだ聞きたいこともあるんだった。
でも、まず最初に言うべきことは。

「あの、わざわざ介抱していただいてありがとうございます」

「そんなに気になさらなくても大丈夫ですよ、それよりどうしてこんな場所で倒れていらしたんですか」

「それが俺にもよくわからないんですよ、気が付いたらこのベットの上であまり前後の記憶がはっきりしなくて」

これは、本当だ。
気づけば誰かの家のベットの上、前後の記憶はハッキリしない。
正直なところ今も不安に押しつぶされそうだ。

「ところでここはどこなんですか」

「その前に、名前を教えていただけないかしら。ナナシさんでは話しにくいでしょ」

そういえばまだお互いに名前も知らないままだった。

「俺は風間信玄（かざましんげん）、そっちは？　」

「シンゲン様ですね、私はフローラと言います」

フローラか、おそらく外国の人だろうけど喋っている言葉は日本語。

なら、ここは日本なのだろう。

海外に誘拐されてそのままポイとかシャレにならんからな。

「それでここは」

「ここですか、ここはローリア大陸のダキアです、ああ、わざわざ大陸まで言う必要はありませんでしたね、今の時代まず他の大陸から来るなんて無いでしょうから」

「……ローリア？　大陸？　」

まず、最悪なことにここは日本ではないようだ。

そしてこの場所も聞いたことも無い。

それ以前にここ、ローリア大陸と言った。

世界中の地名を全部覚えているほど頭に自信はないけどさすがに世界の大陸の名前くらい覚えてる。
そしてローリアなんて大陸は聞いたことも無い。

「フローラさん、いくら俺が馬鹿そうに見えるからってさすがにそれはだまされませんよ」

「？　別にだまそうなんてした覚えはありませんけど」

てっきりフローラさんのジョークか何かかとも思ったがどうやら本気らしい。
けど、大陸なんてせいぜい7個、さすがに俺でも覚え違いは無いはず。
それとも日本とこの国では大陸の呼び方が違うのだろうか。
まずは確認する必要があるみたいだ。

「あの、ここに世界地図ってありますか」

「世界地図ならそこの壁に張ってありますよ」

そういってフローラさんは俺の左側を指差す。
見れば地図らしきものがかかっている。
ただしそれは俺の知っている世界地図とは大きく違っていた。
世界地図ってのは自国が真ん中に来るように書かれている。
だから見覚えがないのは当たり前と思うかもしれないがそういう次元ではなかった。

地図には右上、左上、真ん中下にそれぞれ一つづつ大きな大陸があるだけだ。
どれだけ探しても日本は見当たらなかった。

「……ちなみに日本はどこにあるんですか」

実に変な質問に思えた。
けれどそれだけ今、この事態が異常だと気づき始めた。
ひとつより最悪な仮説を立てる。

「ニホンですか、聞いた事無いですけれど」

おそらくビンゴだろう俺の最悪な仮説どうり。
ここは、異世界とかそういった類のような。
つまり、俺の世界とはまったく別の世界ってことだ。

第二話　世界についての勉強中！？

俺、風間信玄が目を覚ましてからすでに3時間。
あのあとフローラに俺が異世界から来たかもしれないと言うことを話してみた。
俺の頭がおかしくなったのではないかと疑われると思っていたがあっさりと信じてもらえたようだ。
まあ、信じてくれたのはあくまでフローラさんだからだろう、それに俺もフローラさんじゃなかったら話していなかった。
それからわざわざ食事まで用意してもらい、今は食事が終ったこの世界の現状について説明してもらっているところだ。

「シンゲン様はまったく知識が無いようですから一から説明しますね。まず中央大陸と呼ばれているここローリア、ローリア大陸は現在東大陸と呼ばれている地図上右側のユージャ大陸、西大陸と呼ばれるヴェスファー大陸の三大陸で三つ巴の交戦状態です」

フローラさんは何も知らないであろう俺のために一からわかりやすいよう説明をしてくれていた。

「それぞれの大陸は大陸間戦争の間臨時休戦という形で連合を組んでいます、もともと大陸内で戦争続きだったためあまり仲良く言ってないようですけれども昔よりはずいぶん治安が安定したようです、世界の現状については大まかに言えばこんな感じです」

「あの、できればダキアについても説明がほしいんですけど」

「はい、ダキアは大陸の中央にある国で連合の中心になっています、連合の中心というだけあって町の大きさや数は大陸一です、といってもここはダキアの中でもずいぶん離れた場所ですからそんなに大きくないですけどね、他に聞きたいことは無いですか」

「とりあえず今は大丈夫です、また分からないことがあれば聞いてもいいですよね」

「私に答えられることならいくらでも答えましょう、ところでシンゲン様は別の世界から来たって事は住む場所も無いのでしょう、よければこの町に慣れるまでだけでも私の家で寝泊りされてはいかがでしょうか」

「本当ですか、願っても無い申し出です。ぜひ、お願いします」

「そのかわり我が家では働かざるもの食うべからず、代わりに家事は手伝ってもらいますね」

「それくらいあたりまえです、むしろそれくらいやらせて頂かないと申し訳ないくらいです」

どうやら俺は幸運なことに寝泊りする家を早速確保することに成功したようだ。

これを不幸中の幸いというのだろう。

ただ、いつまでもここに、いやそれだけではなくこの世界自体にいつまでもいるわけにはいかないだろう。

フローラさんには迷惑かけることになるだろうし日本にも急にこっちの世界に来たって事で家族や友人に心配かけているだろう……

心配してくれているよね？
　とにかく明日から元の世界に戻る方法も平行して探してみよう、大変そうだがわめいていても何とかなるわけじゃない、とにかく今はがむしゃらに頑張るしかない。

第三話　そろそろ変化も必要か！？

この世界にきてからすでに5日も過ぎた。
この5日間暇な時間があれば図書館へ行っていろいろ資料を見ていたがさすがに図書館に『異世界からの帰り方』と言った感じの本があるはずもなく、毎日通っているがおそらく無駄だろう。
家の手伝いのほうも大変だが何とかやっていけている。
といっても家事とかをするわけではなく主に農作業の手伝いだ。
この家は隣の家まで徒歩十分と結構離れた場所にある。
なんでも両親が趣味の農業のために広い土地がほしくて、その結果こんな周りから離れたこの場所になったそうだ。
そういえばフローラさんの両親はすでに亡くなっているらしい、流行の病にかかりそのまま他界したらしい。
フローラさんは平気だと言っていたがたぶん寂しいんじゃないかと俺は勝手に思っている。
こんな広い土地、広い家は一人で暮らす身には大きすぎるはずだ、だからこそこんな見ず知らずの俺でも一緒に住まわしてくれているのだろう。
あと他に分かったことはこの国、いやこの世界自体の文明が俺のいた世界に比べてあまりにも進んでないと言うことだ。
電気は通ってないし車もない、戦争してるにしても武器も重火器がないのはもちろん船さえ木製だ。
この前、フローラさんに鉄でできた船は無いのかときいたら「鉄が浮かぶわけ無いでしょ」と笑われた。
もしこの世界で俺の世界の文明品を再現できたら一躍偉大な科学者となれただろうが、残念なことに俺もなぜあんな重い鉄が水に浮かぶのかわからない。

「シンゲン様そろそろ農作業の時間ですよ、早く来てください」

おっと、いろいろと考えを廻らせている内に結構時間がたてしまっていたらしい。

今はとりあえず仕事だけでも済ませておこう。

それから今日は図書館に行かず町でも見て回るか、少なくてもこのままでは埒が明かない、一つ生活に変化をつけなくては。

「シンゲン様、そろそろ昼食休憩にしましょう」

日はすでに頭上にまできていた、朝起きてから今まですでに４時間はたっただろう。

二人がかりで４時間頑張ってもまだ終らないくらいにこの畑は広いのだ。

よくいままで一人でやってこれたもんだ、俺なら３日と続かなかっただろう。

「わかりました、でもせっかくもう少しなんですし俺は残りを終らせてからにします」

「そうですか、では昼食の準備だけ終らしてまっていますね」

そういってフローラさんは家の中へと入っていった。

そのあと、残りを終らすのに1時間もかかってしまった、そのせいでフローラさんを待たせることになってしまい、さらに料理も少し冷めていた。

「すみません、遅くなってしまって」

「いえ、気にしないでください。一人でお疲れ様でした」

フローラさんは待っていたことよりも、一人で作業させたことを申し訳なさそうに行った。

やっぱりフローラさんっていい人だよなと改めて思う。

楽しく会話しながらの昼食を終えてフローラさんは家の家事をしにいってしまう。

初めは手伝おうと思ったが手伝いなら畑作業だけで十分だと言われてしまった。

俺もできれば早く帰える方法を探したいので、その言葉に甘えいつもこの時間に町の図書館へと行っていた。

けれどもこれではいつもと同じく何の進展もないだろうと、そのため今日は町を見て回ることにした。

第四話　町で見たものそれは！？

俺は今町の中を歩いている。
町中では俺はよく知らないおっさんやらおばさんに声をかけられる。
なんでもフローラさんが俺のことを説明してくれたらしい。
ただ赤の他人を住ませていると言えば心配されるだろうから親戚と言うことにしてある、それに異世界から来たとも言えないので同じ大陸内の離れた国から来たともしている。
話はフローラさんから聞いたその国の情報を元に俺が何とかごまかしている。
いつ、ぼろが出るか心配だが今のところ上手くいっている。
この町は比較的狭いため今日一日で町中見て回れるだろう。
けどもあまりこれと言った新たな発見は無い。
そして何も見つけられないまま町の端まで来てしまった。

「仕方ない、帰るか」

今から帰ればちょうど夕食前くらいにつくだろう。
今日の夕食は何だろうかな、なんて考えながらその場で回れ右して家へと一歩を踏み出した時だった。

「あんたね、噂の自称フローラの親戚は」

いきなり目の前に現れたのはずいぶんと背の低い女の子だった。

身長は１５０センチも無いくらいだろう、おそらく１２歳くらいじゃないかと思う。
髪は青色、正確には青と言うには少し薄い水色、それはまるで大空のような美しさがある。
そしてその髪は左右にゴムで止めてありツインテールになっている。
顔立ちもかなり幼く美人というよりはかわいいって感じだ。
着ているワンピースも年相応なかわいさを引き出している。

「どうしたのお嬢ちゃん、迷子？　」

「子ども扱いするな、これでも私は１９だ」

おっと、この年の子はどうやら子ども扱いされることに敏感なようだ、かといって１８歳は無理があるが。
たしかに俺も悪かったのかもしれない。
けど、いきなり蹴るのはあんまりじゃないのか。
俺はそのまま後ろ向きに倒れた。

「いたたたた、なにもいきなり蹴ることないじゃないか、それで何か用かな」

体を起しながら用件を聞く

「あんた、町でフローラの親戚だってホラ吹いて回っているそうじ

ゃない」

確かに嘘ではあるけど、別に俺が言って回ったわけではない。
それより、どうやらこの子は俺がフローラさんの親戚じゃないという確信を持っているようだ。
おそらくフローラさんと仲がいいのだろうか。

「私はあんたみたいな悪い虫が近づかないようにしてるの覚悟しなさい、虫けら」

そういうとこの女の子はどこから取り出したのか手に持っている刀を鞘から抜きこっちに向けてきた。
女の子がなんて物騒なものを持っているんだ、って、それよりこのままじゃ切られそうだなんとかしないと。

「いや、ちょっとまってくれ今説明するから、これには事情があるんだ」

「……何よ、言ってみなさい」

「えーっと……」

そういやなんて説明すればいいんだろうか、まさかそのまま異世界から来ましたなんて言ったら間違えなく切り捨てられる、かといってとっさに上手い言い訳が思いつくはずも無く。

「言いたいことは無いようね、覚悟」

そういうと女の子は刀を思いっきり振り下ろしてくる。

「うわっ、そ、そんなもの振り回したら危ないだろ」

俺はとっさに右側へと体をずらして避ける。
大振りだったことと、この子には刀は重かったのかふらついてくれたおかげで何とか回避する。

「なんで避けるのよ、おとなしく当たりなさいよ」

「む、無茶いうなよそんなの当たれば大怪我するじゃないか」

「大怪我だけで済ませるわけないじゃない、くらえ」

女の子は再び刀を振り上げるとこれまた物騒なことを言いながら振り下ろそうとする。
ただ女の子の力では限界だったのだろう、そのままふらつき後ろ向きに倒れていく。

「きゃっ……くっ、不覚……」

女の子はそのまま勢いよく地面に後頭部をぶつけると最後に何事かつぶやきそのまま気負を失ってしまった。

「……これは、どうしたらいいんだろうか」

勝手にやって来て、勝手に人のことを殺そうとし、勝手に自爆して気を失った女の子を前に俺は途方に暮れていた。

第五話　その少女、目を覚ます！？

どうするも、こうするもこんな町中で倒れてる女の子をほっとくわけにはいかない。
どうやらこの子はフローラさんの知り合いみたいだし家に連れて行くのが正解だろう。
俺はその子を背負うとそのまま帰路に着く。

「フローラさん、ただいま」

「お帰りなさいシンゲン様、って、あら？　背中に背負ってるのは何ですか」

家に着くと玄関でフローラさんが迎えてくれていた、なんかこのやりとり夫婦みたいだな、と内心ニヤついていたりする。

「町の中であったんですけど、ちょっとしたごたごたがあって気を失っちゃって、ほっとくわけにもいかないし、どうやらフローラさんの知り合いみたいだったから連れてきました」

説明してフローラさんにも顔が見えるよう女の子をすこしずらす。

「あら、ディアナちゃんじゃない。そういえば今日が帰るっていってた日だっけ」

「やっぱり知り合いだったんですね、で、この子……ディアナはどうすればいいでしょうか」

「そうね、シンゲン様の隣の部屋に連れて行ってあげて、それとご飯ができてるから部屋に寝かせてあげたらダイニングに来て、ディアナちゃんの分は目が覚めてから別に作るわ」

「わかりました」

そのあと、俺は背中で無邪気な顔して寝息を立てているディアナをベットに寝かせるとダイニングに向かった。

フローラさんは食事中に会話をするのがあまり好きではないらしいので、食事が終るのを見計らい、リビングでディアナについて聞いてみる。

「ディアナちゃんは、ディアナちゃんの両親と私の両親が仲良かったせいか物心つく前から仲良くしていたの、幼馴染ってとこかしら」

「それで彼女は俺が親戚じゃないって分かったわけですね、って、あれ物心付く前からってディアナっていったいいくつなんですか」

「19歳ですよ、見た目のせいでそう見えないかもしれないけど本人も気にしてるみたいだからあまり子ども扱いしないであげてね」

どうやら19歳ってのは本当だったらしい、「ディアナ、ごめん」と心の中で謝っておく。

「あれ？　フローラ、ってことはここはフローラの家？　何で私はここにいるんだっけ」

どうやらディアナは眼を覚ましたらしい、寝ぼけながらハッキリしない記憶を必死に思い出そうとしている。

「えっと、たしか町の中でホラ吹きの虫けらを見つけて……それで……あ、虫けら、なんでフローラの家にいるのよ」

「おはよう、ディアナちゃん」

「え、あっ、おはようフローラ……って、そうじゃなくてこの虫けらがなんでここにいるのよ」

「シンゲン様のこと？　シンゲン様は家に居候しているんですもの、いてあたりまえだわ」

「なんでこんな虫けらを居候させてるのよ、こんな危険なの近くに置いといたらいつ襲われるかもわからないし危ないわ、即刻追い出すべきよ」

「大丈夫よ、シンゲン様は信頼できるはディアナちゃんだってわたしの特技知ってるでしょ」

「そ、そうだけど……でも……」

ディアナは言い返す言葉を失ってしまったらしい、それより気になることが一つある、フローラさんの特技ってなんだろう、それを聞いたとたんディアナも黙ってしまったし少し気になる、そのことをフローラさんに伝えると。

「私、昔から人が嘘をついてるかどうか見分けることができるんです」

にわかには信じがたいが、おそらく信頼性の高いものなのだろう、フローラさんと付き合いの長いディアナの無言がそれを肯定している。

「へー、ってことはフローラさんの前では嘘がつけないって事ですね気をつけないと」

「気をつけるも何も嘘をつかなければいいのでは」

そのとうりだ、とはいっても俺は元よりフローラさんに嘘をつくつもりはないし深く気にすることも無いか。

「じゃあ、私はご飯の用意をしてくるは、ディアナちゃんもお腹すいてるでしょ」

そういうと、フローラさんはそこから席を立っていってしまった。
リビングには俺とディアナの二人が取り残される。

第六話　気まずい空間二人きり！？

「……」

「……」

ディアナはこっちを向こうとせず、また、喋る気配もない。
非常に気まずい、誰か、何とかしてくれ。
別に俺は彼女に遠慮があるわけでもない、むしろ。

「なあ、ディアナってフローラさんと幼馴染ってことはここに住んでたんだろ、けど、なんか久しぶりに帰ってきたみたいなこと言ってたし、なんで今はここに住んでないんだ」

「……」

「わかった、きっと言い難い事情があるのだろう、なら、あの刀はいったい何なんだいくら刀を帯刀することが認められてるからって、普通一般人はあんなもの持ってないぞ」

「……」

っと、このようにずっと黙ったっきり、相当信頼されてないなこれ。
確かにフローラさんのように見ず知らずの俺を簡単に信じられるのが変わっているってのは分かるけど、返事くらいしてもいいと思

う。

「俺のことを怪しむのはいいがせめて会話くらい成り立たせてくれよ、そうすれば俺のこともわかるだろうし、それからなら俺を信用するか、それでも怪しい奴と判断するかは勝手だからさ」

「……分かったわよ、答えればいいんでしょ」

お、ようやく俺の必死さが伝わったらしい、これでこの気まずい空気とおさらばだ。

「で、ここにいなかった理由でしょ、仕事よ、少し前まで前線に出ていたのよ、今は戦争中だからなかなか休暇が取れなくてね」

「へー、って、前線って戦場のど真ん中だろ、何でそんな危険なとこに」

「まあ、確かに危険ではあるけどさ、艦長なんだし当たり前でしょ」

「……いや、ちょっと待て、それはあれか、友達とのごっこ遊びとかそういう類か」

現代の日本ならテレビゲームって説もあるがここにはそんなものはない。

「残念でした、正真正銘、船の艦長よ、ローリア連合海軍ディアナ大佐って言えば結構名前が通ってるとは思うんだけど」

「大佐って１８でかよ、俺も軍隊には詳しくは無いけど大佐って上のほうの階級だろ、さすがにそんな嘘には騙されないぞ」

「だから最年少の大佐として名が通ってるんじゃない、ローリアは人材も不足してるし少し前まで陸戦ばっかだったか海戦の技術が低いのよ、だから昇進しやすいの、といってもそんな簡単じゃないけどね」

それはそうだろう、難易度が下がっているとはいえ簡単に昇進できるなら、そこら中大佐だらけになるだろう

「なら、もしかしてお前って結構すごい奴なの」

「そうよ、ちなみに刀を持っていたのも大佐だし危険があるといけないからって事よ」

「でも、刀を振り上げただけでふらつくんじゃ持ってる意味が無くないか」

「う、うるさいわね、別に振り回せなくても持ってるだけで相手への脅しになるからいいのよ」

そういいながら顔を真っ赤にしている、どうやら刀を振り上げてそのままこけ、気を失ったことをそうとうきにしてるようだ。

まあ、さすがにあれは恥ずかしいよな、ディアナのためにもその話題は触れないでいてあげよう。

それから、しばらくディアナと話していた、どうやらディアナも多少心を許してくれたらしい。

「ディアナちゃん、ご飯が出来ましたよ、ダイニングまでいらっしゃい」

いつのまにか結構時間が経っていたらしい、フローラさんが呼びに来ていた。

「うん、今いくよ」

ディアナもそうとうお腹が空いていたらしい、目を輝かしてすぐにダイニングへと向かっていった。

ああいう姿はまさに子供みたいだとは、思うけど絶対口には出さない、さすがにまた蹴られたくは無い。

食事も終るとリビングで俺はディアナとフローラさんと話しをし

ていた。

「ディアナちゃんはどれくらいこっちに居れるの」

「今は前線も少し落ち着いてるから1週間はいられるはずよ、戦局が変われば分からないけど」

「で、ディアナちゃんはその1週間家に泊まっていくのよね」

フローラさんは久しぶりに会った幼馴染を相手にうれしそうに話していた。

やっぱり幼馴染は特別なんだろうな。

「うーん、最初はそのつもりだったんだけどこいつが居るからね、どうしようかな」

そういってディアナは俺を指差す。

多少は打ち解けていてもまだ完全には認めてもらってないらしい。

「大丈夫よ、シンゲン様は何もしないわよ」

おお、めっちゃ信頼されてる、これはかなり嬉しいぞ。

「でも、ま、フローラがそういうなら信用してもいいか」

こうして、二人暮らしは1週間だけの三人暮らしへと変わった。

第七話　ラッキースケベはお約束！？

朝、ディアナがこの家にやってきた次の日。
俺はいつもどうりの時間に起きて、いつもどうり朝食を準備する。
俺は料理が下手なため昼と夜の食事の準備はフローラさんに任せているが、朝食べるような軽いものなら作れるので自ら朝食の準備を買って出た。
フローラさんは自分がやるからと言っていたが、俺は無理矢理、朝食当番へとなっていた。
今日はトーストとスクランブルエッグ、これが俺の限界だが朝はこれでいいだろう。
なんていったて、昼にはフローラさんの作ったご飯が食べられるのだ。
フローラさんの料理は味はもちろん、そのレパートリーも多いため決して飽きさせないのだ。
お、とか言ってる間にトーストが焼きあがる、それと同じくしてスクランブルエッグも出来上がる。
俺はそれらを皿に盛り付けると二人を呼びにいくためそれぞれの部屋へと向かう。
フローラさんは部屋をノックすると「はーい、すぐに行きますね」と返事が返ってきた。
毎朝のことなので、何のよう出来たのかわかっているため無駄な会話が省ける。
次はディアナのところだ、部屋の前まで来てノックをする。

「……」

返事が無い、聞こえなかったのかと思いもう一度ノックをしてみる。

「……」

もしかして寝ているのだろうかと思い「入るからな」と一声だけかけて部屋へと入る。
そこでは予想どうり寝息を立てているディアナの姿が。
仕方ないから起こしに行くかと歩き始めて気づく。
今日は暑かったからだろうか、ディアナは布団をかけていない状態で寝ていた。
いや、それどころか服すら着ていない、上半身裸の状態だ。

「……体も子供体型かと思ったが意外とそうでもないんだなぁ、って俺は何を見てるんだ、とりあえず眼を覚ます前に部屋を出ないと」

急いで部屋から出ようとしたのだが。

「うーん、あれ、朝？　」

朝が弱いのだろう、寝ぼけたまま体ごとこっちを向きボーっとこちらを凝視。
一方、俺は顔を真っ赤にしたままうろたえていた。
後になってなんでディアナの眼が完全に覚める前に部屋を出なか

ったのかと後悔することになる。
とにかく、部屋を出るのが間に合わないうちに、ディアナは部屋の中に俺が居るという事実と自分が服を着ていないという状況をしっかりと認識してしまい。

「キャァァァァ、変態、死ね、くそ虫、害虫、虫けら、くず、ゴミ、死ね、死ね、死んじゃえぇぇ」

家中にディアナの叫び声が響き何事かとやってきたフローラさんに呆れられてしまった。

「……もう、お嫁にいけない……」

「悪かったって、このとうりだ、許してくれよ」

ディアナはあの後も数分間、泣き続けていた。
ご飯はとっくに冷めている。
俺もわざとではないとはいえ、さすがに悪かったかなぁ、と思いさっきからもう何分も土下座を続けている。

「ディアナちゃんもそろそろ許してあげたら、本当にわざとじゃないみたいだし」

フローラさんも俺のフォローに回ってくれている。

「いや、本当に悪かったって、何でも言うことを聞くから許してくれ」

「……何でもって本当に何でも？　」

「……いやあ、まあ、俺にできることなら何でもかなぁ」

俺の何でもと言う言葉に反応したのかもう泣き止んでいた。
何でもは言い過ぎたかなぁ、と思うがでも泣き止んでくれたんだしよしとするか。
ディアナは鼻をすすりながら、真っ赤に腫れた眼でこっちを見ていた。

「……わかった……今回は許してあげるわ、次は無いと思いなさい」

ディアナはいつもの強気な態度に戻っていた。
こうして俺はディアナに何でも言うことを聞くと言う条件で、この『朝からドッキリ！！　ラッキースケベ事件』の示談に成功した。
……何でも、か、出来れば大変なことじゃなければいいんだけど。

第八話　海兵隊と揺れた心！？

朝食を終えたあとはいつものように畑仕事。
今日は朝から少しトラブルがあったため開始が遅れたが、三人でやればペースが全然違う。
結果、終わりはいつもより早く、昼食も少し早めに済ませ、俺の自由時間はずいぶん確保された。
かといって、よく考えればすでに八方塞、とりあえず今日も町を周ってみてから図書館に行くつもりだがおそらく新たな発見は無いだろう。

「この小さな町だけじゃここら辺が限界かな」

ふとそんな呟きがもれてしまう。
そう、出来れば他の町も見て周りたい、だけど恩人にフローラさんをほっといてこの町から出れるほど俺は恩知らずじゃない。

「どうしたもんかな」

問題はそれだけじゃない、お金もない俺はフローラさんの庇護なくしては3日と生きながらえないだろう。
ふと、壁のポスターが目に止まる、そういえばこのポスター町中で見かけるっけ。
そのポスターは真っ白な紙に『海兵募集』の文字だけが簡潔に書かれたものだった。

どうやら本格的に兵が不足しているらしい。

「海兵か……」

とにかく人が欲しかったのだろうか海軍に入隊するのに試験や面接もなくまた経歴不明でも即採用と書かれていた。
いろいろと大丈夫なのか心配になるが、そう、これなら俺でも雇ってもらえそうだ。
給料もなかなか多い、これならこの町から出ても生活に困ることはまず無いだろう。

「けど、せめてフローラさんに恩を返すまではここを離れるわけにはいかないよなぁ」

結論、しばらくは現状維持ということで決定。
どうせ焦ったところで確実に帰れる保障は無いんだし、もう少しこの生活を楽しんでもいいはず。
そう、俺はかなりこっちの世界になじんできていた、毎日が充実してる。

第九話　幕転化、幸福は続かないもの

「さ、次はあの店に行くわよ、ちゃんと付いてきなさい荷物持ち」

「はいはい、わかりましたよお嬢様」

「何それ、馬鹿にしてるの」

俺はただ今、町中でディアナの命令により買い物の荷物持ちをしている。

何でも言うことを聞くと言ってしまったからには、どんな非道な命令を下してくるかと思ったがこんなんでいいのか、まあ、本人が満足しているのなら問題は無いんだけど。

「こんなに色々服とか買ってるけど着る機会はあるのか、休暇は一週間だけなんだろ」

「別に買ってすぐに着なきゃいけない決まりは無いでしょうが、私はこれを戦場から無事に戻ってくるための活力にしてるのよ」

「活力ね、服がか？　」

「服自体じゃないわ、まあこんなかわいい服着てみたいって気持ちもあるけど、それだけじゃなくて、たとえば今度の休暇にはこの服を着てフローラとピクニックに行こう、とかこっちの服を着てショッピングに行こうとかよ」

「へー、ってそこに俺は含まれないんだな」
「なに、入りたいの？　まぁ、どうしてもって言うんならつれてってあげないことも無いけど」

いつもどうりの日常、ほんとにくだらなくて、それでも俺の悩みなんて忘れるくらいに楽しくて、それが……

「……うそ……どうして」

目の前が真っ白になる。
今は突っ立ってるべ時じゃない、行動を起すべきなんだ。
そういう簡単なことに気づくのに時間がかかった。
大量の汗が流れ出す。
これは俺の不安からなのだろうか、それともただ熱さから出ている汗なのだろうか。
俺はいそいで家の中へと入った。
這い居てすぐに玄関で倒れているフローラさんを見つけることが出来た。
頭からはバケツの中身でもひっくり返したのかと言うほどの出出血が見て取れる。
俺は服を脱ぐとそれでフローラさんの後頭部を押さえ急いで家から出て病院へと向かった。

今回の事件はディアナを狙った敵国の工作員による攻撃だったらしい。
犯人はすぐに捕まったがその場で自害し詳しくは分からないままだ。
前例の無いことらしい、内部からの裏切りでもなく工作員は明らかに他国の人間だとの事だ。
大陸の周囲には死角が出来ないよう大量の見張りを置いてある。
何らかの進入経路があったのだろうがそれも分からないままだ。
そしてこの事件により、フローラさんは帰らぬ人となった。

葬儀も終わり本来の予定より早いがディアナは軍に帰ることになった。
あんなことがあれば当たり前なのだろう、葬儀を行うための時間だって無理に作ったのだろうし。

「なあ、ディアナ頼みがあるんだが」

「無理よ、諦めなさい」

「……まだ何も言ってないんだが」

「どうせ、『俺を海軍に入れてくれ』とでも言うつもりなんでしょ、無理よ」

「んなっ……用はそのとうりなんだが何で無理なんだよ、海軍だって人手不足なんだろ」

「戦争は遊びじゃないのよ、入れてくれなんていわれて簡単にはいどうぞなんていうわけ無いでしょ」

ディアナは急に語調を荒げる。

「遊びなつもりは無い、こっちだって真剣なんだ」

「あんたまで……あんたまで死ぬつもりなの……」

ディアナはそういうと俯いてしまう。

いくら人が死ぬのは見慣れているからといって親友の死をそう簡単に割り切れるものでもないだろう。

きっと俺より傷は深いはずだ。

「俺はこんなこと繰り返してほしくないんだ、戦争が終ればこんな悲しみも二度と起きない」

「……なんで……なんで……かってにしなさいよ」

ディアナはそういうとついて来るよう促しそのまま歩いていった。

それから海軍の本部に付くまでの間、言葉を交わすことは一切無かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0805w/

目が覚めるとそこは異世界だった！？

2011年9月19日18時48分発行